

米欧回覧の会 イタリア旅行記(2002. 10月5-14日)小野博正

10月5日 欧米回覧の会のイタリア旅行参加の12名は成田よりルフトハンダ航空にてミュンヘンに入る。フォーラム・ホテル・ミュンヘンに投宿後、あわただしく荷を解いた後で、ホテル下の地下鉄駅より市庁舎のあるマリエン広場を目指した。チェックのスカートを着たスコットランドの一团と写真など撮り、ラートハウスの地下にある有名な穴倉式ビア・ホールで軽食を取りながらビールを飲む。うなぎの寝床のような長く広いビア・ホールであった。まずは乾杯で門出を祝う。



そのあとで、明日が最後の日となるオクトバーフェスト（収穫祭＝ビール祭り）を覗こうと、再び地下鉄で3つ先の駅で降り、帰りの客の流れに逆らいながら会場へ急ぐ。会場には色んな出店や的屋、お化け屋敷、ゲームセンターなどが並び日本の一寸と大きなお祭りの出し物のような通りに出たが、夕食の後でもあり、色のついたソーセージも、ポップコーンも首に吊るせる大きなチョコレートの板も欲しくないのも、生憎小雨模様となったこともあり途中でUターンして地下鉄でホテルに戻る。欧州最大のビール祭りで、欧州中のスリ・かっぱらいが集合していると聞かされ、雰囲気さえ味わえば長居は無用との思いもあった。祭りの人情はどここの国も変わらないようだ。

ぬくもりと言う名の賑わいビール祭

通りぬけ小雨に戻る収穫祭

さびしきがゆえに集うやビール祭

10月6日ホテルをバスで出て、中央駅に向かう。途中でバスの中より、ミュンヘンの落ち着いた構えの古色蒼然たる街を垣間見る。ドイツは英才教育の大学あり、学校は無料と言う。19世紀の銭湯屋の煙突があり驚く。昔、城壁に囲まれた街だったようだ。

たじろぎし秋色の街重く古り

ミュンヘン中央駅よりユウロ特急“ミケランジェロ号”にて6人の個室，2つに別れて乗車する。我々の指定車が先客に不法占拠されていて勇ましい中年女性ガイドに追い出してもらう。やっとトランクを狭い個室に収める。通路にまで、乗客が溢れて、通行もままならない。昼食は、ワゴン売りのビールとサンドウィッチで済ませる。車窓の眺めの変化を楽しみながら、実記の文章を朗読したり、欧州の歴史談義に長途の疲れも忘れて熱中する。若盛ドクターのブランディーの差し入れもたちまち空になる。ドイツ，オーストリア，そして今回の旅のハイライトである一つブレンナー峠を越えてイタリアに入り，一路フィレンツェへ。フィレンツェではアングロ・アメリカン・グランドホテル泊。

秋色の窓に流れてチロル越え 秋ひと日歴史談義や汽車の旅 かの旅もこの道行くや暮の秋



雪山の麓に迫り黄葉かな

夜はやっと捜し当てたお目当てのイタリア料理店で料理を注文したが、一品一品が出されるのが実にゆったりとしていて、郷に入らば郷に従えとは言え、食事が終わるまで3時間余を要したので、さすがの紳士淑女ぞろいのわが一行も、少々声高の民族談義に及ぶ。然し料理はとても美味しかった。

民族の性（さが）を肴に秋の餐

10月7日フィレンツェの市内観光は、麗人伊藤ガイドの案内で小高い丘の上にある、市内の眺望がえられるミケランジェロ広場からはじまる。花の女神“フローラ”より名づけられた“花の都”フィレンツェは、ダンテが「ローマの名高く美しい娘フィオレンツア」とその祖国を讃えている。フィレンツェは1300年代に共和国が勃興し、そのフィレンツェに古代復興(ルネサンス)が起こったのは偶然ではない。その共和国的理想がマキャヴェッリ、ミケランジェロ、ポッティチェリを生んだ。まさに街そのものが、芸術の都であり、歴史博物館である。然し、この荘厳たる美も文明も、強大なる富の偏在に起因し、その富はまた民族間の抗争による略奪等の行為なしにはなかったことを考えると、文明のパラドックスを感じ、複雑な思いにもなる。1860年イタリアを統一した、ヴィットーリオ・エマヌエーレ国王は、一時その伝統に敬意を表して、首都をここに定めたが、1870にローマに移した。若盛先生は青銅のユダヤ教・シナゴグ寺院を見て、丸い形の屋根はシナゴグ教会には珍しいという。フィレンツェは高台からの眺めがすばらしい。アルノ川に沿うフィレンツェは京都盆地に似る。アルト川の120キロ先に斜塔のピサがあると言う。

秋の日や朱き薨の犇めきて 山の端へつづく薨や秋の声

ベッキオ橋までタクシーで戻りドウモオ、ベッキオ宮殿やサンマルコ修道院を散策しつつ見学。宮殿の荘厳さに驚き、修道院僧房の巢窟のような部屋に夫々の華麗なフラスコ絵に感歎しつつ、キリスト教文化への思いを新たにする。ウフィツィ美術館が月曜休館で見学できなかったのは本当に残念だった。次回を期す。FORUMはイタリア語の「広場」が語源と知る。

秋愁やいにしへびとの栄華あと 小窓より秋光もるる修道窟

夜は再び、イタリア・レストランに挑戦。フィレンツェ風ビフテキに有りつく。昨夜ののんびり給食に懲りて、注文をてきぱきとやると、驚くことに打てば響くように、電撃的に料理が運ばれてきて、あっという間に食事は終わる。イタリアの両面を見る思いで一同大満足。期待のビフテキも絶品であった。その後、アルノ川沿いにある、岩倉使節団も泊まったホテル(現在はウエスチン・エクゼシオールホテル)に立ち寄り、そこのバーで音楽を聴きながら、食後の余韻に浸りつつ往時を偲ぶ。



翌8日はフィレンツェを後にして、昨日と同じ伊藤ガイドのもとにバスにて、フィレンツェのローマ門を抜けて

て、一路シエナ街道、アッシジ街道を進みトスカーナ地方のぶどう畑、オリーブ畑、枯れたとうもろこし畑などの田園風景を見ながらアッシジに向かう。

岩倉ミッションは日本の街路樹に何が良いかにまで目をくばり、ポプラ、プラタナス（鈴懸け）などを持ち帰って日本に移植したともいわれる。

オリーブの実の熟しおる日和かな

鈴懸の実りたわわにトスカーナ

アッシジは小高い丘の上にある町。遥かに平野を走ってきたの遠望はのどかで、独特のピンクの大理石が秋の陽に映えて美しい。町に入るとかなり急勾配の石畳の坂道がつづく。道も狭く、自動車が一台来ると通行人は、避けて待たなければならない。聖フランチェスコ教会で、日本の神父の滝さんに案内してもらおう。聴音器を使つての静かな説明である。さもないと、壁のフラスコ絵が崩れ落ちると言わんばかりに。ジョットの「小鳥を説教する聖フランチェスカ」は遠近法と精神性を絵画に取り入れ、ルネッサンスの扉を開いた記念碑的絵画と言われている。

町なべて聖人伝説秋の丘

聖人を語る秋寂（あきさび）の異国僧

ローマは“ターミナル”の語源となった、テルミナ駅の近くのメディテラネオ・ホテルに投宿。明園中華料理店で夕食。



9日は若き江副ガイドの元気な声で終日ローマ遊覧。岩倉使節が来たころのローマは羊がのどかに寝そべる草原の丘であったろうとガイドは言う。コロシム、カラカラ浴場跡、フォーロ・ロマーナ、アグスチウス皇帝の凱旋門を見て、真実の口で全員めでたく正直無垢の衆であることが実証されて一同安心。風呂好きのローマ人は、午前中勤務して、仕事は昼には切り上げて、風呂に入り、午後はおしゃべりと社交に費やし、金儲けの情報交換も専ら風呂場で行われたらしい。現代人にも理想的境地に思える。楠田公使が館長を勤める日本文化会館を訪問し、館長と大内桃子さんの案内で館内を視察する。日本文化の普及に努めておられる。あと館長とご一緒に、お話を聞きつつ、予想外に豪華な昼食にありつく。ポルト・ディ・リペッタ・レストランである。今回の旅行で食事の部ハイライトであった。午後から、トレビの泉、スペイン広場、バチカンのサンピエトロ寺院を見学。天気は晴れて、雲って、遂にはバチカンで雨となる。ちょうど大ミサの終わったばかりの、サンピエトロ寺院の壮大美しい美と建築と人ごみに酔う。ゲーテでさえ、“ローマは1個の世界であって、それに通暁するには、まず数年を必要とする”と言っている。言わんや、一介の我々にして一日でローマを理解できるはずがない。

実記も“ローマの古都を暦覧すれば、西洋の所謂開化なるもの、皆源をここに引き、その由来の久しきを知り、国民の智識その端を繙く結習の深き、遠きに亘りて滅せず、塞りても、また開くことを証すべし。”とたたえることを忘れていない。ローマは古代ローマの遺跡の町であ

り、現在の首都でもある。この夜はタクシーで駆けつけた民謡レストランのダメオ・パタッカでイタリアの美声を聞きながらの夕食を愉しむ。

秋草や殺し合う種の哀し性（さが）

秋霖や虚構華麗な大聖堂

秋うらら罪なき子らのコイン投げ

秋の日の七つの丘のたたづまひ

柱頭の孤高にたてり秋の空

秋の夜の旅のまどいのカンツオーネ

10日朝ローマを後にしてバスにてポンペイへ。途中、驟雨あり、ポンペイの町は水が道路に溢れていたが、着いたとたん降り止む。街の中のレストランで昼食後ポンペイ遺跡見学。2000年前の、ポンペイの人々の優雅な生活に驚く。文明は果たして進歩しているのだろうかの感興しきり。

秋風や古りし都の生活（たつき）あと



秋蝶や轍のしるき石畳

ポンペイは3時ごろ切り上げて、夕方にナポリに着く。ホリディー・イン・ホテル泊。このホテルは、侵入路が狭く、バスが路地に入ると交通渋滞激しい。ローマ在住の会員でもあるデマイオさんがホテルで出迎えて呉れる。小休息のあと、たそがれのナポリのサンタルチア地区に出動し、ナポリの中心街で喫茶して、散策し、玉子城近くの浜に面したレストランのラ・ベルサグリエラにて五月美鈴（泉先生命名）ことデマイオさん手配の夕食を戴く。彼女は高貴で品があつて、日本語は端正で、声は鈴のようと言うのが若盛先生のお言葉。同感である。デマイオさんの大学教授就任と速報のあつたばかりの日本人のノーベル賞受賞を祝い乾杯。空には月あり、客船棧橋に3隻の豪華客船が満艦飾で係留され、港町ナポリの夜景の絶景とワインにすっかり酩酊する。

安んじて死なんや今宵月ナポリ

佳きひととあり新涼のレストラン

三日月に磯波かえす玉子城

ヴェスヴィオを隠しナポリは月の中

1 1日はナポリ駅からボローニアまでユウロ特急に乗りトスカーナ地方を戻り、ローマを経てイタリア半島を北上する。ボローニアにてバスに乗り換えて、ベニスへ。汽車の中で隣あったスイスからきた女性連れ二人と話す。シシリー近くの小さな火山島に泊まって、ポンペイのような古い文化を残しているすばらしい所で数日を過ごした由。シシリーから船でナポリに上陸し、フィレンツェに向かうという。面白かったのは、そのうちの一人が、曾祖父が1870年代の岩倉使節欧米回覧と同時代に、商売で日本に渡り、すっかり日本を気に入って、日本は天国だと帰りたいがらず、親戚のものを迎えにやってやっと戻ったという。彼女の母親がドイツ人のハンブルグで今も思い出の写真集を持っているという。思わぬ偶然に驚く。夕方ベニスのローマ広場近くのソフィテル・ホテルに着く。この夜は始めて、一同は二手に分かれて行動する。一手はアルト橋までの路地をさまよい歩き、末に一匹一万有余円の鱸を食べ、ボラレータと嘆き、一方は、流しの芸人に飛び入りした泉先生の唄声を聞く。

1 2日は一日中ヴェネツィアの市内回遊。ガイドは女性の足立さん。



水漬くドウカーレ宮殿、サンマルコ寺院、コレール博物館を見て、ゴンドラで運河を流す。泉先生が実記を朗々と朗読し、その後期せずして歌声が起こる。朗読のくだりは次の如し。
“この日は駅舎より直ちに艇に上る、艇の製作奇異なり、舳首騫起し、艇底円転として、舳に屋根あり、中に茵席を安んず、棹を打ちて泛泛として往返す、身を清明上河の図中におくが如し、市塵鱗鱗として水に鑑み、空気清く、日光爽やかに、嵐翠水を籠めて、清波淪紋を皺む、艇は雲靄杳緲の中を行く、飄々乎として登仙するが如し、府中の人、音楽を好み、唱歌を喜び、伴を結び舟を蕩かして、中流に遊ぶ、水調一声、響き海雲を遏めて瀏亮たり、旅客の来るもの、相楽しみて帰るを忘るるとなん” 皆、雰囲気に酔いけり。

ヴェネツィアを水の都、海の都と呼ぶ塩野七生は“ヴェネツィアの運河は船を通すためではなく、葦の沼地に築かれた都市が沈まないように、水を逃がすための水路である”という。ヴェネツィアの商人の交易は最初は塩と塩付けの魚であったが、後に奴隷と木材であ

った。奴隷の得意先はアフリカの回教徒で、カソリック以外の異教徒（キリスト教徒、ギリシャ正教徒も含む）、6世紀にはアングロ・サクソン人、9世紀には東欧のスラブ人（slaveの語源）を奴隷市場で売って富を蓄えた。奴隷は多くは軍隊に使われ、木材は軍船となった。今は、イタリアはファッションとスパゲッティと観光を世界に売り、日本からはアニメ、自動車、コンピューター、日本食、漢字のデザイン等がブームを呼んでいると言う。

秋灯し路地つなぎゆく橋の数
うそ寒のベニスの露地を迷いけり
秋の潮ヴェニスの街を浸しけり
秋霞塔のあなたに鳶の影
聖堂の塔に消えゆく秋の蝶
みおろせば水の都の秋意かな
たゆとふてゴンドラのゆく秋の水
秋冷の鐘の音すがしベニス発つ

古代イタリアはエトルリア人が紀元前7世紀に入植し、その後ラテン系のローマが都市国家を形成し、4世紀初まで繁栄をきわめた。その後、ローマの首都がビザンティオンに移るにつれて往時の輝きを失い、11世紀に、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサが貿易都市国家として台頭、ミラノ、パドヴァ、ヴェローナ、シエナ、フィレンツェも手工業と商業で13世紀にはこれら北イタリア諸都市がヨーロッパの経済の中心となる。然しその後、18世紀まで都市間の抗争から、貴族が台頭し、ルネッサンス文化を謳歌するが、スペイン、オーストリア、フランスの干渉を受けて、夫々の王国として繁栄したが、（ローマ人はフィレンツェの水は飲まない。フィレンツェの人はローマの水を飲まない。）と独立意識が強く、全国的に統一されてのは、岩倉使節団が訪問した僅かに12年前の1860年であった。この為、使節団のイタリアを見る目は、政治より自然観察や歴史的モニュメント、美術などに興味と時間を費やし、「土沃ニシテ民に惰状あり」と政治経済の研究を切り捨てた感がある。幕末から明治初年にかけて、米欧への日本留学生690人に対し、イタリアへ行ったのは、私学生の田中文助ひとりであったとも言う。

私自身も、今回の旅行の前に「白人（グローバル）スタンダードと言う新たなる侵略」と言う本を読んだためか、かなりこの本に毒されていて、このイタリア旅行もかなりバイアスが掛かった目で眺めていたかもしれない。その著者は“白禍論”と称し、白人は太陽の紫外線を守る色素が欠けた劣性遺伝民族で、太陽光線の少ない、北国に追いやられた。北の寒冷地では植物が育たないので、肉食となり動物を殺し、毛皮を剥いでコートにし、略奪が一番簡単で、一番豊かな生活を保証するので他民族を略奪する。略奪は優秀でないと出来ないで、知恵が発達し、征服した民族は奴隷にする。大航海時代は、世界征服の別

名で、植民地化をすすめて、近世500年で白人が南北アメリカで1億人のインディアンを殺し、1億人の黒人を奴隷にして使った。彼らには、先祖が北に追いやられたことから、復讐の念がDNAに刻印されており、略奪しないと生き残れなかったのが白人のトラウマには「優勝劣敗」が刻み付けられていて、これが今のグローバリゼーションに繋がっているとその著者の清水氏は言う。

この観点でイタリアや欧州の都市・文化を見ると、すべて略奪の文明に見えて、甚だ困った。キリストの十字架さえ、血塗られた宗教に見える。ローマのコロシウムを奴隷をライオンと格闘させて面白がって食わせた“殺し生む”といい、アングロ・サクソンは“暗黒搾取”で、その民族が熱中するラグビーは“拉首”で、昔、敵の首を争ってとって、抱いて走った名残りというから念が入っている。

イタリア旅行より戻ると、142年前のイタリア統一に貢献した、サヴォイア家のヴィットリオ・エマヌエーレ2世の末裔は、第2次世界大戦後、国民投票で憲法に王制の廃止を謳い国外追放になっていたが、この度憲法が改正されて、エマヌエーレ4世他の元王族の帰国が報じられた。奇しきことである。

それにしても、実記の足跡を追体験してみて、いかに久米さんの記録が細微を極めているか、観察力が優れているか、文章力があるかを身にしみて感じた次第。

今回、パラダイス・ドクターこと、若盛ドクターが、団員一同の健康管理に様々な方法で心を砕いていただき、また大いに旅を楽しませていただいた。飛鳥400泊の春団治こと梶大人夫妻、鈴木教授の博学なるメディア・政治家談義。会話に困った時の納家さんのスペイン語が役だったのもラテン系言語と言うことで何となく納得。グルメ担当の大場・有馬さんの活躍など枚挙に暇のない、団員諸氏の多士済済ぶりであった。泉団長も引率本当にご苦労様でした。良き旅に深謝。良き旅に乾杯。

血は熱きおみなおきな秋の旅

